

論文要旨

学位論文題目：現代日本の若者はいかに「恋愛」しているのかー首都圏の高学歴・正規雇用者の場合ー

氏名：大口（大森）美佐

目的と研究方法

本研究は、首都圏在住の4年制大学卒以上で22歳～29歳（1987～1990年生）までの異性愛者の未婚男女で、正規雇用者であるもの対象に行ったインタビュー調査のデータをもとに、かれらが「恋愛」をどのように意味付けどのような恋愛行動をとっているのか、また、「恋愛」と「結婚」や「性」および「生殖」との関連をどのように認識しているのかを、かれらの恋愛をめぐるコミュニケーションのあり様に注目することで明らかにすることを目的とする。上記の研究目的のもと、本研究では、以下の3つのリサーチ・クエッションを設定し、3章から5章でこたえた。

- ①高学歴・正規雇用の若者たちは、出会いから交際（交際しない）、「別れ」という一連のプロセスの中でどのようにコミュニケーションを行っているのか。かれらのコミュニケーション特性を把握するとともに、その背景要因をかれらのメンタリティを含めて明らかにする。
- ②高学歴・正規雇用の若者たちはセックスをどのように意味付け、行動しているのか。かれらの性に関する行動内容（例えば手をつなぐ、キスをする、セックスするなど）と規範意識との関連に注目し、かれらが「付き合う」という関係をどのように意味付けているかを明らかにする。
- ③高学歴・正規雇用の若者たちは、恋愛と結婚、結婚と性および生殖をどのように関連づけ、行動しているのか。また、その背景要因をかれらによる「恋愛」への意味付けを含めて明らかにする。

結果・考察

第3章では、出会いから交際、別れという一連のプロセスの中でどのようにコミュニケーションが行われているのか、また、そのようなコミュニケーションが行われているのはなぜかを考察した。本研究の調査対象者たちの間では、異性間における恋愛コミュニケーションの作法が共有されていることが確認できた。そして、こうした相互行為を内省的に解釈し、観測し合うことで、最終的には「付き合う」という関係を確認する作業として、「告白」が行われていた。また、「付き合う」際の「告白」は、多くの場合、男性から女性に向けて行うことが理想とされ、その告白を女性側から男性側に暗に促すというケースも見受けられた。男性メンバーの語りからは、「ガツガツしない」ことが強調されたが、最終的な意識確認に関しては男性の役割として認識しており、内面化されたジェンダー規範が見え隠れする。次に、「別れ」の局面でのコミュニケーションについて考察を行なった。調査対象者たちの語りからは、「付き合う」ことをスタートさせるよりも「別れ」を切り出すことの方が「辛い」「面倒くさい」というメン

タリティがあることが確認できた。そのため、「別れ」という局面をいかにスムーズに済ませ、できるだけお互いが傷つかなくてもいい方法はないかを模索する様子うかがえた。そして、そこでは、直接的に自ら別れを告げることを回避するような対応として「音信不通」という方法が取られていた。

第4章では、若者たちの性に関する詳細な行動内容の詳細（例えば手をつなぐ、キスをする、性交渉など）と規範意識との関連に注目し、かれらが「付き合う」という関係をどのように意味付けているかを明らかにすることを課題とした。分析の結果、調査対象者たちからは、男女関係が脱制度化したといわれる今日においても、排他性を守ろうとする意識が男女ともにみられ、未だに親密性のあり方は、「付き合う」という契約関係を結ぶことによってカップルとしての儀礼的行為が発生し、セクシュアルに排他的な関係を要請している、いわば「制度的」な関係であることが確認できた。そして、それらの意識の間にはジェンダーによる差異が確認された。特に、男性メンバーの数名からは、親密関係を負担に思う意識も確認され、性行動を行わないことで関係の調整を方策していた。その背景として、本研究では、「孕ませる」性としての男性特有の責任意識が関係しているのではないかと考察した。つまり、生殖と「セクシュアリティ」そして、生殖と結婚を結びつけるような意識が、避妊を含む生殖医療の技術的な進歩とは別にして男女ともに残っており、それらの意識が恋愛行動にも影響を与えていると考えられる。

第5章では、調査対象者たちが、どのように恋愛と結婚、結婚と性および生殖を関連づけ、行動しているのかを明らかにすることを課題とした。分析の結果、30歳という年齢に近づくにつれ、「付き合う」とことと結婚との関係がより緊密化していく過程を捉えることができた。家族の多様化・個人化に関していえば、階層が高い層ほど多様な選択肢をもち、自由な選択によってライフコースを築けるのに対し、階層が低い層は個人化や多様化のしうる可能性が乏しいと考えられてきた。しかし、一定の経済水準以上の階層である本研究の調査対象者たちは、個人化や多様化の流れには乗らずに、かれらの親世代がつくりあげた近代家族像と同じものを築くことを希求し、最終的には「結婚のための恋愛」へと恋愛の意味づけを書き換えていることが明らかになった。

結論

本研究では、①「付き合う」とことと性行動、②30歳を目前とした年齢における「付き合う」とことと「結婚」、③結婚と生殖（性行動）、のこれら3つが相互に連鎖的に関連していることを明らかにした。また、特定個人のなかでも文脈に合わせた「恋愛」への意味づけが行われており、ときには「性-愛-結婚」の結びつきを強く意識し、また異なる関係においては全ての結びつきを解体するようなパラドックスがあることが明らかになった。しかし、最終的には近代家族像に収まるようなかたちで「恋愛」を「結婚のための恋愛」と意味づけ、行動する調査対象者たちの姿を捉えることができた。この点はいずれかの階層が影響を与えているのではないかということが示唆された。